

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌



特集 英語が苦手な生徒への支援

巻頭エッセイ

- 自分の持つ選択肢を意識する生き方を 瀬谷ルミ子 01
- 学校研究への取り組みを通して 日暮滋之 02
- 「音読」と「書く」を大切にせず生徒を支援 河原木かつ子 04
- スモールステップを大切にしたりーディング活動 石崎雄一 06
- 「スローラーナー」を巻き込む楽しい活動 関口 智 08
- 英語授業を支える学級集団づくり
—言葉で人間関係を育てる— 榎葉みつ子 10

特集

英語教師のための基礎講座

- 授業マネジメントの勤どころ：話し方の勤どころ【番外編】 田邊祐司 12
- 評価クリニック 既製テスト問題の利用を考える 根岸雅史 14
- 授業レポート
コミュニケーション力を高める英語の授業(3) 林 秀樹 16
- 小学校英語 Just Now
アルファベットを使ったコミュニケーション活動 木下聖子 19
- 単語の文化的意味 87 lie 森住 衛 21
- Essay Naming Characters in *NEW CROWN* Thomas Hardy 22
- 英語指導のスパイス 翻訳機の逆利用!? 荒尾浩子 23

- AROUND THE WORLD 北ゲルマン語を巡って [4] 森 信嘉 表紙裏
- 表紙写真について ウェルズの大聖堂 編集部 表紙裏

Vol.30

SPRING 2015
SANSEIDO

連載

古ノルド語 Q の秘密

古ノルド語の入門書と言えば E. V. Gordon 編著による *An Introduction to Old Norse* が特に有名である。北ゲルマン語資料の背景と文法解説、語彙集に読解練習用のテキストが収められている。テキスト全体の9割以上を西ノルド語が占め、東ノルド語は1割弱である。西ノルド語の代表格と言えばアイスランド語であろう。そのため古ノルド語は古アイスランド語と称せられることもある。現代アイスランド語は「言語の化石」と呼ばれることがあるくらい、古アイスランド語の姿を継承している。宗教改革があった年は1550年であるが、アイスランド語史では1500年代半ばを1つの区切りとするのが一般的である。この時期に古語と現代語を区別する音韻変化、語尾変化が生じている。1200年代から1900年代にかけての文献に現れる語の頻度調査によると、もっとも使用頻度の高い語は今も昔も変わっていない(アラン・カーカー編『北欧の言語』)。

古ノルド語で使用されていたが現代の北ゲルマン語では見られなくなった文字に Q がある。o に短い尻尾が生えたような文字であるが、筆者はこの文字がこのほか気に入っている。しかし音価がよくわからない。「フィヨルド」のことは現代アイスランド語で fjörður と表記されるが、古ノルド語では fjǫrðr となるので、Q の音価はいわゆる「オ」と「エ」の間のような音 ö であろうと想像していた。ところが、ノルウェーで使用される高校の教



アイスランドの Gullfoss (金の滝)

科書に Q は å, つまり「オ」/ɔ/ と発音すると書かれていた。一方、古ノルド語の入門書の1つで Q は「円唇後舌広母音」とされていた。つまり、/a/ に円唇が加わったものということである。説明が微妙に異なっている。思わず「Qって何?!」と叫んでしまう。

困った時はノルウェー語に救いを求めるのが筆者の常である。ノルウェーにおける書き言葉の1つに古ノルド語とノルウェー諸方言を基盤として作られた「ニューノシュク (nynorsk)」がある。さらに、ノルウェー語は方言が豊かである。そこで、「Qって何?!」を北ノルウェー語方言風のニューノシュクで言ってみる: “Ka er Q for noko?!”。この文に現れる単語にあたる英語の単語を順番に挙げると “what is Q for something” となるが、発音は「カー エル Q フォル ノーコ」である。なっ、なんと! この文の中に答えが隠されているではないか! 「カーエルノーコ」。そう、Q は実は「蛙の子」つまり、「オタマジャクシ」のことなのではないか。「おーたまじゃくしはノルノ〜蛙の子〜ノルノ…」。どうりで掴みどころがないはずだ。

表紙写真 について

ウェルズの大聖堂

編集部

イングランドではあちこちの大聖堂を訪れたが、サマセット州 (Somerset) ウェルズ (Wells) の大聖堂は特に印象に残っている。

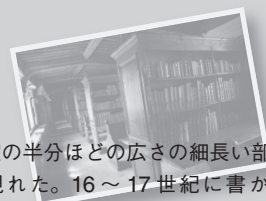
12世紀後半から建築が始まったとされるウェルズ大聖堂 (Wells Cathedral) は、大聖堂としては中規模の大きさである。しかし、中世の面影を残すその堂々とした荘厳な外見は、訪れた者の目を釘付けにし、魅了する。一方、大聖堂前に広がる緑の広場では、街の人々がベンチや芝生に座り、本を読んだり家族や友人と談笑したりしている。人口1万

人に過ぎないイングランド最小のシティ (city)、ウェルズの街の日常は大聖堂とともにあることが理解できる。

大聖堂の中に入ると、主祭壇へと続くまっすぐな中央通路がステンドグラスから差し込む柔らかい光に照らされている。高い天井へと広がる大きな空間は、そこにいただけで心が洗われるような気がして心地よい。建物の中央まで進み、立派なパイプオルガンの下をくぐり抜けると、大聖堂では珍しい“Library”の表示が。石でできた螺旋の階段を上へと進む。すると、その先に学校の

教室の半分ほどの広さの細長い部屋が現れた。16～17世紀に書かれた約2800の蔵書が保管されている Library。この場所で、中世の聖職者たちも本を読みふけたのであろうか。そんなことを考えていると、心は一気にタイムトリップしてしまう。

イングランドにはどんな街にも歴史を感じられる建物が数多く残されている。日常の喧噪を忘れさせてくれるそんな場所との出会いを楽しみに、次の旅の計画を立てようと思う。





自分の持つ選択肢を 意識する生き方を

認定NPO 法人 日本紛争予防センター 理事長
瀬谷ルミ子 Seya Rumiko

私は仕事柄、アフリカや中東、アジアの国々で現地の人々とともに復興のための事業を行い、現地の政府、軍人、警察、住民に研修を行う機会が多い。

私にとって英語は、コミュニケーションのための「道具」だ。その道具を使うための「目的」を持ち、自らの能力や専門性を高め、腕を磨くことも必要だ。そしてその道具も、多いほうが便利である。言葉と同じくらい重要なのが、それぞれの地域の文化や慣習を理解することだ。例えば、イスラム教を信仰するソマリアやアフガニスタンなどの地域では、女性が髪や肌をあらわにしたり、公の場で積極的に発言したりすることが不適切と思われる場合もある。そのため、私も頭に布を巻き、身体のラインが出ないような服を着る。会議の際に男性スタッフと事前に話す内容を打ち合わせしておき、代わりに発言してもらったこともある。こうすることで、私が自分の価値観を押し付けにきたのではなく、現地の文化を理解し敬意を払っていることを感じ取ってもらうことができ、信頼醸成の基盤となるのだ。

紛争地の人々を見て感じるのは、生きる上での「選択肢」の欠如だ。紛争地では、生きるか死ぬかすら自ら選べず亡くなっていく人々が数多くいる。紛争が終わっても、貧困や被災で、最低限の衣食住を確保するのに精一杯で、生き方を選ぶことも困難だ。

私たちの団体が、南スーダンの内戦で身寄りをなくして路上生活をするストリートチルドレンに社会教育や職業訓練を行う事業を始めた頃のこと。絶望と空腹からシンナーを吸ってばかりいた現地の子もたちに、「いま一番欲しいものはなに？」と聞いてみた。お金やドラッグ、と言うかと思ったら、ほぼ全員が「学校に行きたい」と答えた。彼らにとっては先の見えない生活のなか、想像できる範囲で唯一人生を変えて

くれるかもしれないものが、教育なのだ。しかし、それすらも満足に選ぶことができない。

私は、進路も決められず社会に不満ばかり抱えていた高校3年生のときにルワンダ内戦の犠牲者の写真を見て、自分には生き方を選ぶことができる権利があることに初めて気づいた。そしてそれは、世界の全ての人々が持つものではない、ということにも。

「皆さんの人生には無限の選択肢がある」という台詞は、聞き飽きている人も多いかもしれない。私がおもうひとつ付け加えたいのは、その選択肢のひとつひとつには「使用期限」があるということだ。自分で気づかないうちに、中学生の時点で既に使用期限が切れているものもある。例えば、プロのフィギュアスケーターやピアニストになりたいくても、中学生から始めて実現するのは極めて困難なように。

「やりたいことが多すぎて選択できない」と悩む人には、使用期限が短い選択肢を整理したうえで、「これを今やらなければ数年後に後悔する」と思うものはすぐに行動に移すことを勧めている。時間がたてばたつほど、行動しない言い訳だけがどんどん増えていき、動くのがさらに億劫になるからだ。

英語を将来の自分のための道具として今磨いておくかどうか、中学生にとっては選択肢のひとつ。その選択も含め、生き方の選択をひとつひとつ意識して行動に移すことで、自らの人生をデザインする権利をフル活用してほしいと思う。

せや るみこ

中央大学卒、英ブラッドフォード大学紛争解決学修士号。ルワンダ、アフガニスタン、シエラレオネ、ソマリアなどで国連PKO、外務省、NGOの職員として勤務・事業を統括。専門は紛争後の平和構築、治安改善、兵士の武装解除・動員解除・社会再統合(DDR)。著書に『職業は武装解除』(朝日新聞出版)。Newsweek 日本版「世界が尊敬する日本人25人」(2011年)等に選出。

学校研究への取り組みを通して

日 臺 滋 之

(玉川大学)

1. はじめに

筆者のゼミに、高校の英語教師が生徒の興味・関心を引きつける授業をしてくださったことで、学習が楽しくなり英語教師になりたいという夢を抱くようになった学生がいます。これは、後の各論で述べられているような教師の工夫で学習が楽しくなった好例といえます。しかし、個々の教師の実践だけではうまくいかないケースも多く、学校研究として英語学習の効果を上げる実践も必要だと思います。それは英語を苦手とする生徒を生み出さない実践でもあります。筆者が実際に関わった学校研究をいくつか紹介したいと思います。

2. 英語がわからなくなるのはいつ頃からか

ベネッセ教育総合研究所では、「中学生の英語学習の実態と、英語や外国に対する意識」について、2009年1月～2月に全国の中学2年生2,967名(有効回答数)を対象に調査をしています。その結果、「英語を苦手と感じるようになった時期」として、中1の夏休み後くらい(12.8%)から中1の後半(26.6%)にピークを迎え、中2の夏休み頃(3.8%)に苦手と感じるようになった生徒は、中1の始め頃(16.2%)よりも少ないことがわかっています。多くの生徒が英語を苦手と感じるようになった中1の夏休み後くらいというのは、教科書では三人称単数現在が導入されたり、doの疑問文に加えてdoesの疑問文が出てきたりと、言語操作が複雑になり、語彙も増えていく時期と重なります。

この調査からわかることは、英語に対する苦手意識を取り除くためには、中1での英語学習がとても大切であるということだと思います。

3. 英語がわからなくなる要因について

英語の授業で学習したことが定着していかないと授業がわからなくなり、授業について行けなくなります。この原因は、授業時数とも関連があると思います。ELEC Crossroads Projectの「英語教育の目標および目標達成の方策」という政策提言の中で、英語が定着しない状況を以下のように分析しています。

「現行の教育課程で公立中学校では週3～4時間の英語授業を行うことになっているが週4時間としても学校行事、祝日などの関係から実際に行える授業頻度は週3.5時間内外である。週7日で考えると1日おきということになる。次の授業までに習ったことを忘れ、また新しいことを習っては次の授業までにまた忘れるといったことのくり返しになってしまいがちである。中学の基礎英語さえ多くの生徒に定着しない現状は、このような中で生まれているのである。」

この英語の週時数からくる間歇的^{かんげつ}な英語学習は、教師の努力だけでは解決できず、制度に工夫を加えないと解決できない問題であると思います。

4. 学校研究により学習効果を上げる取り組み —英語を苦手とする生徒を生み出さないために

(1) 少人数指導と習熟度別指導

筆者が1981年に赴任した長野県の山間部にある中学校は、各学年2クラスの小規模校であり、そこではすでに少人数指導、習熟度別指導が行われていました。英語の授業が始まると、2年生の英語を苦手とする生徒6人ほどが、所属教室を離れて別教室に移動し、習熟度別授業を受けていました。

授業を担当してみると、少人数の生徒の教室だけに、生徒は臆せず疑問点を教師に質問し、授業に関わることができました。これは、1対40の普通教室の環境ではできないことで、よかった点でした。一方、少数指導で、苦手意識を持った生徒の教室は、仲間から学び合う場面が少なく、教室での学習のトーンが停滞気味となるのが課題でした。

(2) 複数教科によるモジュール授業

先述の長野県の中学校では、生徒たちが英語に触れる機会を増やし、学習効果を上げる目的で、1年生の英語の授業は、週に50分授業を2回、1時間を半分に割った25分授業を2回の週4回実施していました(当時、英語は週3時間)。25分にするために、数学の授業と組み合わせて時間割を編成し、数学では計算力を高める指導を、英語ではドリル的な活動に力点を置いた授業を行いました。教師は生徒と週に出会う回数が増え、生徒の学習状況がわかるし、生徒も英語に触れる回数が多いので反応もよく、週3時間の授業よりは効果があったと思います。

課題点もあり、前半の数学の授業の時には、私が廊下で待機し、25分たつと飛び込むように教室に入り、生徒をせかして教科書やノートを出させ、すぐ英語の授業を始めましたが、それでも5分前後の口スは出てしまいました。また、活動の途中で25分となり中断することもありました。英数とも、授業はドリル的な活動に絞られるので、活動計画や時間割編成に工夫が必要でした。現行の週4時間でモジュールを導入すれば、毎日英語に接するだけに効果が期待できると思いますが、時間割編成や効果測定の方法が課題になると思います。

(3) 文部科学省「研究開発学校制度」の利用

研究開発学校制度は、学習指導要領等の国の基準によらない教育課程の編成・実施が認められる制度です。東京学芸大学附属世田谷中学校では、2003年から6年間にわたってこの指定を受け、現行の学習指導要領と同じく英語の授業時数を、各学年140時間(35週×週4時間)と定めていました。さらに、3年間の英語の総時数を変えないで、1年生に英語の時数を集中させる授業実践を行いました。各学年週4時間の授業ではなく、1年生では週6時間、2年生・3年生ではそれぞれ週3時間とするカリキュ

ラム(6-3-3システム)で指導した方が、英語学習の効果が上がるのではないかと考えたからです。1年生の6時間の授業のうち、4時間は教科書を使っての授業、残り2時間は通して、「ALTとの授業」と「文法+αの授業」をそれぞれ隔週で行いました。

これは先取り型の授業ではなく、「ALTとの授業」では、生徒が教科書で学習した内容を使ってプレゼンテーションする授業で、「文法+αの授業」では、教科書で学習したことを丁寧に復習し固めていく授業です。英語に対する苦手意識の生まれる1年次にリソースを集中投下し、間歇的な英語学習の弱点を克服するという考え方です。英語科が中心とはいえ、他教科と授業時数の調整が必要ですし、職員会議での合意も必要になります。また、英語科の中でも、1学年により多くの時数を投入することで、かえって英語嫌いが増えてしまうのではないかとという心配もありましたが、予想される問題点を解決しながら、他教科の教師の同意を得、研究開発学校への応募、そして審査合格にまでこぎ着けることができました。

この実践では、3人の教師が1年生を担当することで教師同士が生徒の情報をシェアすることができ、生徒の進捗状況が手に取るようにわかり、苦手とする生徒の早期発見とその対応をすることができました。また、6-3-3システムでないときには、中3の校内英語スピーチ・コンテストの SCRIPT の中には、部分的に何を言いたいのかわからない英文が何件かありましたが、6-3-3システムの生徒にはそのようなものはありませんでした。中1での成果が影響しているのではないかと思います。さらに詳細な分析については、金谷他(2012)をご参照ください。

以上、3つの学校研究を取り上げましたが、苦手対策あるいは苦手を生み出さない指導としての効果を検証するには、複数での学校での追試の実践が必要です。他教科の先生方とのチーム・スピリットを発揮し、学校研究に取り組んでみませんか。

【参考文献】

- 金谷憲他(2012).『英語授業は集中!—中学英語「633システム」の試み—』東京学芸大学出版会.
- 文部科学省(2014). 研究開発学校制度.
- ベネッセ教育総合研究所(2014).「第1回中学校英語に関する基本調査(生徒調査)・速報版[2009年]」.
- ELEC Crossroads Project(2014).「英語教育の目標および目標達成の方策」.

特集 英語が苦手な生徒への支援

「音読」と「書く」を大切にして つまずく生徒を支援

河原木かつ子

(青森県八戸市立白山台中学校)

1. はじめに

小学校外国語活動では、子どもたちは「聞く」「話す」の活動を中心に、英語の単語や文を聞いたり、話したりしながら、簡単なやり取りをし、また、クラスやグループの中で英語を使ってのゲームにも取り組んでいる。そのため、外国語活動を楽しんでいた子どもが多いと思われる。

一方、中学校の英語科では、「聞く」「話す」に、「読む」「書く」の学習が加わり、さらに「正確さ」が求められることになる。生徒は、その求められるものの質や量の違いに、とまどうことが予想される。このとまどいを予想して授業を進めないと、生徒はつまずき、意欲が低下することも考えられる。

「読む」「書く」を習得するためには、継続した努力が必要である。例えば、中学校での文字の導入時について考えると、小学校では扱っていなかった「読む」「書く」は、生徒にとっては魅力的だ。外国語活動で、ある程度の英語を聞いたり、伝えたいことを英語で言えるようになったと感じている生徒たちは、今度は英語を読んだり書いたりできるようになりたいと望んでいるであろう。これらが簡単にできるようになると考えている生徒もいるかもしれない。しかし、彼らは学習してみると、日本語とは違い、アルファベットを覚えたかからといって、すぐに単語が読めるようになるわけでも、書けるようになるわけでもないということがわかってくる。やはり、文字と音を結びつけて繰り返し発音する中で、その単語や英文が読めるようになり、何度も書く練習をして、その単語や英文を書けるようになるのである。

生徒が、意欲をもってその努力ができるようにな

るまで、時間をかけ、工夫して指導する必要があると考えている。小学校外国語活動で音声での指導はできていると思って、すぐに覚えて書けるようになることを生徒に求めると、生徒はとまどい、つまずき、意欲が低下するのではないかと危惧する。

2. 予想されるつまずきへの指導・支援

(1) つまずきへの指導・支援の基本理念

生徒は基本的に「自分を認めてほしい」という思いを持っている。そのため、できるだけ授業前に家庭学習(宿題)の点検をし、努力を評価し、学習意欲を継続させるように努めている。家庭学習をやれなかった生徒にはやれなかった課題を学校でやるようにしむけ、やれるという自信をもてるように支援する。継続した努力が「できる」につながることを理解させる。

指導者は、生徒がどの場面で理解できずにとまどうのか、どの場面で進めなくなってしまうのか、意欲を低下させてしまうのか等を予測し、指導計画を立てる際に手立てを考えておく必要がある。

(2) 文字と音とのマッチング

入門期に小学校で学習したローマ字(訓令式)と中学校英語のローマ字(ヘボン式)との違いにとまどう生徒を多く目にしてきた。これが、入門期の最初のつまずきであると考えられる。shi, chi, tsu, fu, cha, jaなどを定着させる手立てとして、日本語が英語になっているsushi, tofuや地名Hachinohe, Osaka, Hokkaidoなどを繰り返し練習させ、書けるように励まし、苦手意識のある生徒には練習に寄り添い、小テストやコンテストで何度も確認をしながら、1学年の5月中にはヘボン式ローマ字が書けるように支援する。その後

は、NEW CROWN (以下 NC) の SOUNDS でフォニックスの規則性が身に付くように指導する。文字と音を繰り返し結びつける中で規則性を理解し、単語を発音する中で読んだり書いたりできるようになるのである。英語学習において、英語が読めることは大切である。それは、英語が読めないと、書けるようになるのは難しいと考えるからである。

(3) 音読の継続

音読を継続して取り組むこと、すなわち、読みを鍛えることは、英語学習においてはとても大切である。生徒が文字を見て発音する機会を多くもつことが必要で、単語や基本文の読みをゲームとして授業の中に設定するとよい。ビンゴゲーム形式でやると楽しみながら取り組むことができる(資料1)。

また、NCのGETの本文や対話文は暗記を目標に音読練習をさせている。生徒の能力に応じてステップを踏んで読めるように、ゴールには暗記を掲げ、右のような本文のワークシートを使っている(資料2)。つまり生徒も自分のレベルに応じて進めることができるし、本文を自分が言えるという成就感をもつことができる。繰り返していくうちに、レベルを上げて、暗記レベルまで達する生徒が増えてくる。「わかった」「できた」の喜びが英語学習の意欲につながるかと信じている。

(4) 基礎基本は語順

NCの各LessonのGETで基本文の定着を図り、Skill-gettingをめざしている。Drillで基本文の練習をするとき、英語と日本語の語順が異なるので生徒はつまづくことが多い。英語文法の基礎基本は「語順」と考える。そこで、常に生徒に語順を意識させるようにしている。「語順シート」なるものを提示し、語順を意識して英文を話したり、書いたりできるようにしている。Word Cornerで語彙を補充し、Skill-using活動へとつなげ、自己表現の幅を広げることができる(資料3)。

(5) 基礎基本を精選して「書く」活動

授業で学習した本文から基礎基本となる文を精選し、音読しながら家庭でノートに「書く」ことを課題としている。1年生から継続しているので学年が進むにつれて抵抗感がなくなってくる。もちろん、家庭学習はチェックし、評価する。Lessonの終わ

りには、単元テストをし、基礎基本の定着を図る。

3. おわりに

基礎基本を精選し、「音読」と「書く」を大切に、英語学習を進めていけば、つまり生徒を救うことができ、さらに「できる」という成就感を味わわせることができると確信している。

資料1

オレンジジュースはいかがですか？
あなたの家にもだちが来ました。いろいろなごちそうで、もてなしてあげましょう。

★次の22品の中から自分がほしいものを16個選び、シートに1つずつ好きな絵に英語で書き入れる。
★交互に相手に22品の中から1つずつ勧める。選ばれたものが自分のシートの中に書き込んであれば、Yes, please. と書いてOをつける。なければ、No, thank you. と書くだけ。先にOが1列そろった方の勝ち。

資料2

Lesson 7 Good Presentations ~GET Part 1~ (練習P.7)

[Level A] ★★★★★
This table shows some high mountains around the world.
Mt Kilimanjaro is higher than Mt Fuji.
It is the highest mountain in Africa.
Can you name the highest mountain on each continent?

[Level B] ★★★★★
This table (s) some (h) mountains (a) the world.
Mt Kilimanjaro is (h) (t) Mt Fuji.
It is (t) (h) mountain in Africa.
Can you (n) the (h) mountain on (e) continent?

[Level C] ★★★★★
This table () some () mountains () the world.
Mt Kilimanjaro is () () Mt Fuji.
It is () () mountain in Africa.
Can you () the () mountain on () continent?

[Level D] ★★★★★
この表は世界中のいくつかの高い山を指しています。
キリマンジャロ山は富士山より高いです。
それはアフリカで一番高い山です。
あなたは各大陸で一番高い山の名前を挙げるができますか。

資料3

だれが/は	助動詞	～する	だれに	何を	どのように	どこで	いつ
[主語]	[動詞 V]	[目的語 O]	[目的語 O]	[目的語 O]	[副詞]	場所	時
I	will	give	you	a present			
		show	him	my album			
		write	her	a letter			
		send	Ken	an e-mail			
		teach	Emi	math			
		buy	you	a watch			
		make	him	lunch			
		sing	her	a sing			

スモールステップを大切にしたりーディング指導

石崎雄一

(徳島県東みよし町立三好中学校)

1. はじめに

NEW CROWNのUSE Readではまとまった量の英文を読みます。これらの英文を読んで理解するためには次の3点が生徒に必要だと考えます。

- (1) その英文を読みたいという意識を持つこと。
- (2) 十分な語彙力・文法力をつけておくこと。
- (3) 段階的に、そして繰り返し英文を読むこと。

今回はこの3点を踏まえ、スローラーナーにも配慮した授業実践例を紹介したいと思います。

2. 授業実践例

2年 Lesson 6 Uluru USE Read (p.70, 71)の1時間目で、次の3つの学習活動を行います。

- (1) 本文の導入
- (2) 新出語句・ビンゴ
- (3) 本文の内容理解

この授業では、本文の内容(主に事実)を理解することを目標とします。さらに深い内容の読み取りなどの発展的活動は次の時間とします。本稿では、1時間目の活動を中心に述べます。

(1) 本文の導入

- ① ピクチャーカード(エアーズロックの写真など)を見せ、口頭で生徒に質問する。質問は
 - (a) Is this a mountain? / What's this?
 - (b) How many people visit the rock every year?
 - (c) Do you want to climb it? など。
- ② 数人が答えた後で、本文を黙読させる。

以前、先輩の先生から「生徒が英文を読みたいと思う気持ちを持たせる導入が大切」と教えていただきました。そこで、導入の段階でピクチャーカードを使って本文の内容を紹介したり、予測させたりす

る質問をします。ただ、導入の段階で本文の内容を伝えすぎると自分で読む必要性が下がるので、本文の内容を伝えすぎないように注意しています。

導入の質問では(a)本文の内容理解の手助けとなるもの、(b)本文を読めばわかるもの、(c)生徒自身の立場で答えるものの3種類の質問をします。

Yes / Noで答えられる質問を取り入れることでスローラーナーにとっても答えやすくなります。

(2) 新出語句・ビンゴ

- ① 新出語句の発音練習・意味の確認をする。
(ワークシートAを配布する。)
- ② Bingo 1, Bingo 2に語句を選んで記入する。
(それぞれ、10語のうちから9語を選ぶ。)
- ③ 語句1)~10)の発音練習をする。
- ④ Bingo 1をする。
- ⑤ 語句11)~20)の発音練習をする。
- ⑥ Bingo 2をする。

(記入に時間がかかる生徒は③・⑤の発音練習のときも記入を続け、書き終わるように指示する。)

スローラーナーの多くは、Readの本文中に意味がわからない語句が多くあり、読めないと感じるようです。そこで、本文に出る語句の意味を前もって確認させるために、ビンゴゲームをします。

ここでは次のような語句を取り上げます。

- ・このセクションでの新出語句
- ・既習の語句で、新しい意味で出てくるもの
- ・意味が理解しにくいと思われる語句
- ・使用頻度が高いと思われる重要表現

ビンゴを行い、本文中に出てくる20の語句の意味を確認し、発音練習をしておくことで本文の意味が理解しやすくなります。

(3) 本文の内容理解

- ① 教科書本文にあるワークシートAの★の語句に線を引き、意味を書く。
(ワークシートBを配布する。)
- ② STEP 1をする。答え合わせをして、基本的な内容を確認する。
- ③ STEP 2～STEP 4をする。早くできた生徒は解答を黒板に書く。答え合わせをする。

まず、ワークシートAの★の語句(主に新出語句以外のものにつけています)の意味を教科書の英文の下部に書き込ませることで、英文の意味が理解しやすくなります。また、書き写すことで、ビンゴで盛り上がった状態から落ち着いた状態へと雰囲気を変えられることもできます。

次に、各自でワークシートBの質問に答え、本文の内容を理解していきます。質問は本文中で特に押さえておきたい内容を中心に作成しています(教科書のIn-Readingの質問も参考にしています)。

STEP 1は選択式の質問です。選択解答式にすることで、スローラーナーがワークシートに取りかかりやすくなるからです。STEP 2・STEP 3は各段落の内容についての質問で、日本語で答えます。STEP 4は本文全体を読み、英語での質問に英語で答えます。生徒の状況に応じて答えのヒントを出します。

ワークシートBは、読み取りのレベルが段階的に上がるので、苦手な生徒はSTEP 3までをする、得意な生徒は時間を決めて仕上げるなどの指示を出すことで、生徒一人一人に応じた活用も可能です。

3. おわりに

以前、生徒を対象としたアンケートで、ビンゴをしたいという生徒が多く、本文の内容理解に結び付けるためにも、ワークシートAを授業に取り入れました。誰にでも取り組みやすく、今では定着しつつあります。回数を重ねるにつれて、短時間でスムーズに進むようになりました。ある生徒が「わからない語句の意味の確認だけでなく、読み方も確認できるので、後で本文が読みやすくなる。」と言っていました。語句の読み方と意味の両方がわかることで、本文が読みやすくなるようです。

<ワークシートA>

Lesson 6 Uluru [Use (Read)] (教科書 P70, 71)

Bingo 1 本文の中で出てくる語句を確認し、ビンゴをしましょう。(★は新出語句です。)

No.	English	Japanese	line
1	★ 1) looks like ~	～のように見える	L 3
	□ 2) actually	実際は	L 5
	□ ★ 3) during the day	昼間の間に	L 5
	□ ★ 4) looks purple	紫色に見える	L 6
	□ ★ 5) a place to ~	～する場所 (～には動詞の原形)	L 8
2	□ ★ 6) started to ~	～し始めた (～には動詞の原形)	L 11
	□ ★ 7) over 40,000 years ago	4万年以上よりも前に	L 11
	□ 8) deeply	深く	L 12
	□ 9) show respect	敬意を示す	L 12
	□ 10) everything around it	そのまわりのすべて	L 12

Bingo 2 本文の中で出てくる語句を確認し、ビンゴをしましょう。(★は新出語句です。)

3	□ ★ 11) are glad that ~	～ということがうれしい	L 1
	□ 12) among the visitors	訪問者の間で	L 3
	□ ★ 13) some want to ~	～したい人もいる (いれば)	L 3
	□ ★ 14) others want to ~	(他には) ~したい人もいる	L 4
	□ ★ 15) take pictures of ~	～の写真を撮る	L 4
4	□ ★ 16) welcome	～を歓迎する	L 6
	□ 17) culture	文化	L 7
	□ ★ 18) your stay	(あなたの) 滞在	L 7
	□ 19) while	(～する) 間に	L 7
	□ 20) in Anangu Land	アナング人の土地に	L 7

・教科書の中の★の語句に線を引き、意味を下に書いておきましょう。

<ワークシートB>

Lesson 6 Uluru [Use (Read)] (教科書 P70, 71)

STEP 1 P70の段落①を読み、次の質問に答えましょう。

- (1) エアーズロック (Ayers Rock) とは何ですか。(L5) ()
(a) 大きな山 (b) 大きな岩 (c) 大きな川
- (2) エアーズロックは1日で何色と何色に変わりますか。(L6-7) () ()
(a) 赤 (b) 青 (c) 茶 (d) 紫
- (3) 毎年何人の人がエアーズロックを訪れますか。(L7) ()
(a) 35,000人 (b) 350,000人 (c) 3,500,000人

STEP 2 P70の段落②を読み、先住民のアナング人についてまとめましょう。

- ・(4) エアーズロックは()場所である。(L9)
- ・(5) エアーズロックに()という名前を付けている。(L10)
- ・(6) ()に深い尊敬の念を抱いている。(L12)

STEP 3 P71の段落③・④を読み、次の問いに答えましょう。

- (7) アナング人は人々がウルルを訪れることをどう思っていますか。(L1)
- (8) ウルルにおいて、観光客がしないほうがよいことは何ですか。2つ書きなさい。(L3-5)
・① () こと
・② () こと
- (9) この英文(新聞のコラム)で筆者が伝えたいことを表す英文1文を書きなさい。

STEP 4 次の質問に英語で答えましょう。

- (10) When did the Anangu start to live near the rock? (2)
- (11) What do the Anangu teach visitors? (3)
- (12) Do the Anangu welcome visitors? (4)

「スローラーナー」を巻き込む楽しい活動

関口 智

(東京都江戸川区立清新第一中学校)

1. はじめに

「スローラーナー」は自信がないために意欲に欠け、活動にも消極的であることが多い。活動に参加することで、自分にもやれたという達成感を持たせ、自信を持たせる必要がある。どのような活動が参加しやすいのであろうか。

生徒にとって、とても大切な存在である友達の力を活用しない手はない。一人では面倒に感じてしまうことや、難しいことも、友達と一緒にだと乗り越えやすいし、また、楽しく活動できる。

2. Bingo with Hints

現在、授業の warm up として市販の教材を用いて Bingo をやっている。友達とペアを組ませ、Bingo の数が多い方を勝ちとしている。単語を書いてくることを宿題としているが、忘れると友達と勝負ができなくなるため、ファーストラーナーからスローラーナーまで、やってこない生徒はほとんどいない。やり方は教師が単語をただ読み上げて、生徒はそれを聞いて○をしていくのではない。教師はヒントを与え、生徒はその答えを当ててビンゴをするのである。方法は以下の4つを主に用いている。

- ① 定義から連想させる。(animal, black and white → panda)
- ② 対義語から連想させる。(not soft → hard)
- ③ コロケーションから連想させる。(I ... up at six this morning. → got)
- ④ 意味の流れから連想させる。(Coffee is ... → bitter)

Bingo を開始し、ヒントを与えると次々と生徒から答えが返ってくる。Bingo には色々な単語が

あり、スローラーナーにも答えられる単語がいくつもあるため、彼らも答えられるものに関してはいきいきと答えてくる。自分が答えられないものでも他の人が答えてくれるので、問題なく、楽しく活動に参加できる。また、同じ単語が何回か繰り返してくるので、その度に同じヒントを与えていると、スローラーナーでも答えられる単語が増えてくる。

この活動の効果としては、以下のことが考えられる。

- ① 日本語を介さないで英語が認識できるようになる。
- ② 英単語がネットワーク化し、語彙サイズが広がる。
- ③ リスニングの力がつく。
- ④ 既習の語彙を聞きながら連想していくので、単語の知識が活性化される。

教師にとっても、単語の言い換えがうまくなるため、英語で授業を行うための基盤作りになる。

3. 友達紹介

この活動は名前が示すとおり、友達を紹介するものである。この活動にすると友達を紹介するという責任が生じて、やる気になり、紹介するのは自分ではないので、恥ずかしさもあまり感じることなく、人前で話すことができる。やり方を以下に記す。

(1) 第1ステップ

- ① ワークシート(図1)を配り、質問の内容を確認する。
- ② 教師について質問を音読させる。言いにくいところは何回も繰り返したり、個人に当てたりして、スローラーナーを含め、全員が言えるようにする。
- ③ 自分に関する質問の答えを記入させる。質問を受けたり、代表的なものを例示したりして全員が記入できるようにする。聞いてわかる答えを書かせ

友達紹介

Introduction of Your Friend

2-() No. () Name ()

1 自分で質問に答えなさい。

1	What's your name?	My name is
2	What do I call you?	Just call me
3	Where do you live?	I live in
4	Do you have a pet?	Yes, I do. No, I don't.
5	What pet do you have?	I have a(an)
6	What do you do when you are free?	I
7	What's your favorite food?	My favorite food is
8	Who is your favorite singer(movie star)?	My favorite singer(movie star) is
9	What sports do you like?	I like

2 ペアを作って質問し、答えのメモを取りなさい。

1	What's your name?	My name is
2	What do I call you?	Just call me
3	Where do you live?	I live in
4	Do you have a pet?	Yes, I do. No, I don't.
5	What pet do you have?	I have a(an)
6	What do you do when you are free?	I
7	What's your favorite food?	My favorite food is
8	Who is your favorite singer(movie star)?	My favorite singer(movie star) is
9	What sports do you like?	I like

3 クラスの前に出て、友達紹介をしてごらん。

図1 友達紹介のワークシート

ることが大切である。

- ④ 答えの練習を行わせる。机間支援し、スローラーナーでも言えるようにする。
- ⑤ 教師が質問し、生徒が答える練習をする。Read and Look up までもっていく。

(2) 第2ステップ

- ① お互いに紹介しやすい問柄でペアを組ませる。
- ② ペアで質問をしあい、答えをワークシートに記入させる。顔を上げて会話するよう促す。

(3) 第3ステップ

ノートを開かせ、メモをもとに自分が得た情報を英文で書かせる。その際、三人称になることに留意させる。質問を受け、全員が書けるようにする。

- 例) 1. His name is Takayuki.
 2. Just call him Taku.
 3. He lives in Seishin-cho.
 4. He has a pet.
 5. He has a dog.
 6. He plays video games when he is free.
 7. His favorite food is sushi.
 8. His favorite singer is Kuwata Keisuke.
 9. He likes volleyball.

(4) 第4ステップ

皆の前で友達紹介をするための練習を宿題にする。

(5) 第5ステップ(発表)

- ① 発表者へのヒントとして、友達紹介の項目を簡単に板書する。
- ② 発表のメモをとるための「友達紹介の表」(図2)を配布する。
- ③ 発表の際の注意点を説明する。全員がメモを取れるように、大きな声で話させる。聞こえない場合には“Pardon?”と言ってもよい。
- ④ 発表を希望するものに挙手をさせる。毎回4ペア程度発表させる。何回かにしたほうがスローラーナーはやり方を覚えられるし、自分と同じくらいの学力の生徒の発表を見ることはファーストラナーにとってもスローラーナーにとっても大きな刺激となる。全員が発表者になるが、自分たちでいつやろうかと決めることは活動への意欲につながる。
- ⑤ ペアで教室の前で、発表させる。
- ⑥ 残りの生徒は聞きながら、表にメモを取る。未習語などが出た場合は教師が黒板に書く。この活動は次にどういうことを言うかわかっているので、スローラーナーでもメモを取りやすい。そのため、ほぼ全員が欄を埋めることができた。

友達紹介		Introduction of Your Friend							
2-() No. () Name ()		友達の紹介事項(大人数の場合は)							
No.	Name	居住区	Where	pet	好きな動物	趣味	food	singer	sports
1									
2									
3									
4									
5									
6									
7									
8									
9									
10									
11									
12									
13									
14									
15									
16									
17									
18									
19									
20									

図2 友達紹介の表

全員がこの活動に積極的に取り組み、成功させたことで、スローラーナーからファーストラナーまで全員が達成感を持つことができた。特にスローラーナーには自分にもできるのだという自信が生まれた。自信が意欲の元となっていく。教師は誰もがついてこられるよう、温かい目でまた緻密に指導していく必要がある。

特集 英語が苦手な生徒への支援

英語授業を支える学級集団づくり
—言葉で人間関係を育てる—

榎葉みつ子

(広島大学)

1. 学級集団と生徒の学習意欲

年度当初は同じような成績であったのに、次第に学級間で成績に大きな開きが出てくることがある。よく調べてみると、成績が上昇している学級では、より多くの生徒が、彼らの能力を十分に発揮している。それに対し、成績が低下している学級では、授業が不活発で、十分に能力を発揮できない生徒が増えている。

河村(2010)は、学級集団がこれほどまでに生徒の学習意欲、ひいては学力に影響することを、日本の学級集団のもつ「共同体」としての特性を挙げて説明している。年間を通じて同じ仲間と多くの活動を共にする学級集団は、生徒同士の依存度が強く、暗黙のうちにルールを共有するようになる。そのため、属する学級の傾向や人間関係が、生徒の考え方や行動を左右する。「共同体」としての特性をもつ学級では、学級集団作りと学習指導とを切り離すことはできない。

コミュニケーション能力を育成するために、英語教師は、生徒が自分のこと、感想、意見等を表現しやすい集団を作らなくてはならない。また、たくさん間違いをしながら学んでいけるように、間違いを許容し、お互いを尊重する雰囲気を作らなくてはならない。英語の授業中に生徒同士がどのように英語を練習したり、用いたりするか、また、それを教師がどう指導するかが非常に重要になる。なぜなら、「言葉」は人間関係に最も強い影響を与えるものだからである。

2. 英語授業での学級集団づくり

のびのびと自分のことを表現できるような学級を

作るために、集団を組織する段階と、維持・発展させる段階とに分けて、留意すべき点を示す。

(1) 人間関係とルールの確立のために

① どの生徒にも明るくオープンに接する

授業の大前提は教師への信頼である。明るくて誰にも優しい教師は一緒にいて楽しく、生徒に安心感を与える。逆に、気分屋で怒りっぽい教師(そんな教師がいたらの話であるが)の授業では、生徒が緊張し萎縮するであろう。英語の教師は、生徒が心と口とを開きやすいように、努めてリラックスした受容的な態度を取るようし、安定した学級の雰囲気を演出しなくてはならない。

② 生徒の言葉を丁寧に聞く

ひとりひとりの生徒とその学習を大切にしたいと思うなら、まず、言葉を聞かなくてはならない。人は聞いてくれるから話すのであって、聞かない相手には、いくら強制されても話したくはない。言葉を学ぶ雰囲気の基盤は、教師がいい聞き手となることである。

また、丁寧に聞くこと理由は、英語であれ日本語であれ、生徒が発する言葉にはいろいろな意味や価値があるからである。英語で生徒の日常や気持ちが表現されていけば、喜んで内容に耳を傾けなくなるはずである。発話に間違いがあれば、指導に生かす絶好の機会でもある。日本語で思わず生徒が発するつぶやきには、生徒の感嘆や困惑が表現されており、学習を促進するためのヒントが含まれている。

筆者もそうだが、教師はついしゃべりすぎてしまう。「それで?」と促すつもりで、少し黙っているくらいで丁度いいかもしれない。

③生徒の発言を学級の全員に丁寧に聞かせる

教師が生徒の発言を聞くだけでなく、生徒同士にも同じように、相手の発言に耳を傾けるようにさせる。誰かの発言に際しては、“Listen, please!”と全体に促して静かに聞ける状態を作ったり、小さな声の生徒には、“I’m sorry, but will you speak up, please?”と依頼して言い直してもらったりする。だれかの発言を一度で聞いて、生徒同士が自分たちの声でつながることが、聞き手を育てる。いちいち教師が言い直していると、生徒の言葉の値打ちが下がり、生徒はいい加減な聞き方しかなくなる。

④生徒ひとりひとりの活動相手を作る

「誰とでも協力する学級」が理想である。しかし、日頃の交友関係や学力差によって、仲間に入れない生徒がいる場合もある。そんな生徒がひとりでもいるのであれば、ペアやグループワークが成り立つように、必要な調整をしなくてはならない。グルーピングや座席などに配慮することは、授業準備として当然のことである。すでにある人間関係を利用して生徒全員の居場所を確保することから、学級全体の人間関係を育てることにつなげたい。

⑤英語の学び方をきちんと伝える

どのように英語の授業に取り組んでほしいのかを、あらかじめ生徒にきちんと伝える。例えば、

- ・たくさん英語を使って、間違いから学ぶ
- ・たくさん友達と関わることで学ぶ、等。

その際に、納得のいくような説明や実例の紹介をすることが大事である。例えば、多くの間違いから英語を身につけたという有名人の体験談などである。「～しなさい」と言うだけの命令口調の指示には、生徒が一旦は従うことがあっても行動様式として定着しにくい。後に、教師が大声を出して統制しようとすればするほど、反発を招くようになっていく。理由に納得できれば、生徒は抵抗なく指示に従うであろうし、効果が実感できるに従って、生徒は進んでその規範を取り入れていくことであろう。

(2) ルールを浸透させ、人間関係を育むために

①生徒同士が関わる機会を多く作る

言葉を交わし、時間を共に過ごし、共有する課題を協力して果たすことで、人間関係は深まる。授業中は、生徒が英語の学習をするだけでなく、同時に人間関係を深め、仲間を作っていけるよう、生徒同士で関わり合う練習や活動を積極的に取り入れたい。

②生徒が納得する叱り方やほめ方をする

望ましい規範を浸透させるためには、根気強い指導が大切である。間違いを揶揄したり、人格を傷つけたりするような言動が注意を受けずにやり過ごされることは、他の生徒のやる気をそぎ、教師が守ってくれないと思わせることになる。授業中、生徒の言動をよく観察し、承認したり矯正したりすることは重要な指導である。

具体的には、叱る際は、行為を注意するけれど人格を否定しない、あっさりと言う等、生徒に受け入れられるように配慮し、その場で対処する。生徒を育てるために、ほめることはもっと大事である。一生懸命に英語を使おうとしているときなど、微笑む、うなずく、言葉で褒める、学級全体に紹介する等、場面にもっともふさわしい方法を選ぶ。周囲からの承認とそれによって得た自信とを糧に、生徒を自立させることも教師の責任の一部である。

3. 学級集団の自立

ルールが浸透し人間関係が育ってくると、生徒が自主的・主体的に動き出す。生徒が個性を発揮し合い認め合うような言語活動によって、そんな成熟した学級集団を育てたいものである。そして、それは、支援の必要な生徒のために工夫や配慮がなされた、わかりやすい授業において実現される。ここでは、健全で温かい授業中の雰囲気づくりに必要なことのみ述べさせてもらったが、この特集の他の章を参考に、学習指導のより一層の充実と共に取り組んでいきたい。

【引用文献】

河村茂雄(2010)。「日本の学級集団と学級経営—集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望」図書文化。

授業マネジメントの勘どころ： 話し方の勘どころ 【番外編】 ～Speaking力を伸ばすあの手、この手①～

田邊 祐司 Tanabe Yuji (専修大学)

本稿のために、ベテラン教師3人と研究会を開いていますが、今日の会は「英語は英語で」の根底にある教師の英語スピーキング力をめぐる話題で盛り上がりました。内容は刺激のかつ有益で、きっと若い先生たちの参考になるはずです。そこで今回は「話し方の勘どころ」の番外編として、英語スピーキングにつながる各人のシークレット(?)を座談会の形で数回に分けてお裾分けをすることにしました(見出しは割愛しました)。

田邊: まずは日頃から授業の9割以上を英語で進めているB先生から口火を切ってもらいます。スピーキング力を伸ばすには、コンスタントなinputが重要になります。どんなに忙しくてもこれだけは続けているという方法を具体的に話してもらえますか。

B先生: 「英語の授業は英語で」ということで、最近「教室英語表現集」や「クラスルーム・イングリッシュ」, さらに、驚いたことに「大学教員のための教室英語表現」といった本まで相次いで出版されています。確かにこうした「出来合いの表現集」からのリスト・ラーニングは「あり」でしょう。でも私は、自身の生活、特に授業の中から表現を収集することを優先しています。そのため、言い古されたことばではありますが、「これを英語ではどう表現するのか」ということをいつも念頭に置き、実践をしてきました。

この手法での最大のツールは、やはり和英辞書とメモ帳です。たまたま手元に田邊先生から勧められた『ニューアンカー和英辞典』(学習研究社)があります。「英語では?」と思ったときに調べるため、常に携帯しているのです。

先日の授業でこんなことがありました。サッカー

部のイガグリ頭の生徒が膝のかさぶたを触っているのを見て、「かさぶたをかくとかえって治りが遅くなるぞ。」と言いたかったのですが、それが咄嗟には出てきませんでした(the scabは想起できたのですが…)。そこで、“Please give me a sec!”と言いながら、『アンカー』を引いてみました。すると、“The cut won't heal if you pick at the scab.”という例文があるではないですか。「かく」を“pick at”と言うとは…。辞書に一本とられた瞬間でした。生徒にはもちろんこの用例を伝えました。授業後には、“The scab has come off.”(かさぶたが取れた。)などの用例を辞書やネットで探り、それらをメモ帳に残しました。

このように、私のスピーキング力向上の源泉は授業です。授業の中でわき上がった疑問を辞書とメモ帳で押さえ、授業で使いながら自分のスピーキング力の一部にしていくというものです。

C先生: 実に先生らしい手法ですね。私も、クラスルーム定型表現を暗記すればそれで事足りるというものではないと思います。教室では何が起るのか、まったくわかりません。表現集だけで乗り切れるようなものではないですよ。そのために私も和英とメモ帳の連携によるinputを続けています。遠回りのように思えますが、実は一番、着実にスピーキング力が伸びるやり方だと信じています。

私は、生徒からの質問(ときには挑戦?)もさることながら、sourceはALTに求めています。彼らの発話を集めて、メモに残すのがシークレットといえば、そうなのかもしれません。

ある授業のときでした。女性のALTの先生に、生徒から理想の男性について質問が立て続けにあったときのこと。彼女が“I have it up to here.”

と言ったのです。もちろん笑いながらですが…これは「もうたくさん。もうガマンできない。」という意味ですが、「ああ、自分だったら “That’s enough.” もしくは, “I’ve had enough.” と言ってしまうな」と思ったことを覚えています。もちろんメモへの entry は忘れませんでした。

このように、ALT から集めた英語表現を書き込んだ小型のメモ帳は優に 400 冊を越えました。歴代の ALT からは「メモ魔」と畏れられるまでに成長したのです(笑)。誰が何と言おうと (dig my heels in というイディオムもメモにあり)、英語教師である限り、私はこのメモを続けていきます。そしてそれを教室へと還元し続けていきます。日頃から細やかな表現のストックがあってこそ、本当の意味で英語での授業が成り立ち、生徒への正しい input にもなるのではないのでしょうか。

A 先生: まったくもって同感です。どんなに時代が進んでも、やはり「辞書—メモ」はここにおられる先生方は全員やっておられる手法ですよ。まったくシークレットではない! (笑) いや、もはやそんなことすらやっていない先生は、英語のプロではないとまで言ってもいいかもしれません。

わたしもお勧めをひとつ。それは『新クラウン和英辞典』(三省堂)を熟読することです。田邊先生の「辞書を愛でる」に感動し、英文の大家、故 山田和男が編んだこの辞書をかじるほど愛でできました(笑)。秀逸なのが、基本動詞と前置詞を中心とした巻末の慣用語法表です。「及ぶ、達する、入る」を意味する run の項目を見ますと、山田氏が英米の新聞、雑誌、小説などから集めた用例がちりばめられています。「その手紙は 6 頁になった」は、“The letter ran to six pages.”、「8 月が 9 月になった」は“August ran into September.” という具合に、run という基本語の表現範囲が広いことを教えてくれます。

正直、中には少し手垢の付き過ぎた表現もありますが、英語の口頭表現の核心を衝いたこの辞書は昔、英検 1 級や国連英検特 A 級を突破したときの自分のスピーキング力の元になったものでした (Without hoping to sound arrogant!). 今の人には山田氏の『英作文研究: 方法と実践』(文建書房)

はぜひ一度、目を通して欲しいものです。

B 先生: 基本動詞や、基本動詞と前置詞・副詞が連結した句動詞 (Phrasal Verb) は多量に input しておく必要がありますね。さもないと、natural で idiomatic な英語のシャワーを生徒にあびせることはできないと思います。

先般、英語部会の研究授業に行ってきましたが、とある授業者が、“Please distribute the handouts.” と言っておられました。生徒の方は言われた通りプリントを後ろに配っていましたが、これは “pass out” や “give out” の方がずっと natural ですよね (例: Please pass out these handouts to everyone.)。

C 先生: スピーキング力向上のために行っていることをもうひとつ。授業の discourse は、「指示」「発問」「説明」「活動」、さらには「つなぎ」や「ほめ言葉」などで構成されますが、私自身この中で一番、難しいのが英語での「説明」だと思っています。要点を衝き、中学生でもわかる simple で plain な英語で、情報を伝えるのは容易ではありません。

こうしたことがスムーズにできるようになるにはトレーニングが必要です。そのために一番重宝したのが、LDOCE や COBUILD などの英英辞典です。そこで先輩の先生に教わったのが、見出し語を見た瞬間に、その定義を口頭で言うこと、そして逆に定義文を聞いて (同僚や ALT に読んでもらう)、その元の単語を当てるという練習でした。

前者で思い出すのが、stapler (ホチキス) です。LDOCE には “a tool used for putting staples into paper” と定義してあります。tool までは出てくるのですが、for 以下の “putting staples into paper” などはお手上げでした。ネイティブのこうした置き換えの語感をつかむのに時間がかかりました。

初任の年から 10 年間はこうした定義練習を繰り返し返しました。これも地道な方法かも知れませんが、その練習を通して、英語は、大切な情報を先に伝える言語なんだということが実感でき、plain な言葉への置き換えをどう行うかの「勘」も鍛えられたと思います。それが私のシークレットなのかもしれません。

(To be continued)



既製テスト問題の利用を考える

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 既製テスト問題の利用と著作権問題

定期試験の検討会に招かれることがあるが、その際に、教師自身の手によらない既製テスト問題が含まれていることがある。それは、文法のテストであったり、リーディングやリスニングのテストであったりする。本稿では、こうした他者の手によって作成されたテスト問題の定期試験での利用について考えてみたい。

リーディングやリスニングのテストでは、テキストだけを借りてきている場合と、それらに伴う設問も一緒に借りてきている場合とがあるが、後者の場合はまるまる借用していることになる。リスニングなどは、ときに、選択肢が絵で提示されているが、それらが切り貼りしたような形で貼り付いているので痛々しい。また、リスニングの音声素材も編集されていないので、CDの該当箇所だけを流して教室を回るといった話も聞いたことがある。

では、既製テスト問題は、そもそもどこから取られているのだろうか。その出典は主に3つであろう。ひとつは入試、もうひとつは英検などの外部試験、そして問題集だ。これらの問題を著作権者の承諾なしに利用した場合、その利用方法如何によっては著作権法違反となる場合もあるので注意が必要だ。また、利用可能なものであっても、出典を明記することが望ましいと思われるが、テスト自体に明記できない場合、模範解答などに示すのでもいだろう。以下では、著作権の問題をクリアしているという前提で、既製テスト問題の利用について考察する。

2. 既製テスト問題を定期試験に利用する場合の問題点

入試や、英検などの外部試験は、定期試験とはまったく異なる目的を持っている。入試は受験者の英語力の弁別を主たる目的としており、英語力がきれいに弁別されればよい。また、英検などの外部試験はそれぞれのテストの目的があり、それらの多くはある基準への達成度を見ようとしている。いずれにしても、特定の言語知識や技能を集中的に見ようとするのではなく、基本的に、様々な言語知識や技能を幅広くサンプリングしようとしている。また、能力の弁別に主眼が置かれているので、様々な言語知識や技能が複合的に問われていても問題はない。

これに対して、定期試験の目的は、指導や学習の成否を見ることである。基本的に、定期試験ではそれぞれの評価規準に対応した問題が出題されることになっている。そこに複合的な問題を出していると、その結果をどの評価規準として扱うかに問題が生じてしまう。

既製テスト問題をテストの項目ごとに利用する場合でも、テストング・ポイントにずれが生じていないか確認する必要がある。また、一見テストング・ポイントが合っているように見えても、その問題に含まれるその他の部分の単語や文法といった要素にも注意が必要である。それらの知識の欠如が、定期試験の実施対象の生徒の問題の正解を妨げてしまう可能性がある。例えば、次のような入試問題があったとしよう。

下の文の () の中に入れるのもっとも適するものを、あとの1~4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

This robot () for cooking in the future.

1. uses 2. is used 3. is using 4. will be used

この問題は、動詞の「時」に関する知識を問うているように思われる。しかし、もし“in the future”という表現が未習であれば、2を正解だと思ってもおかしくないだろう。

入試の過去問などを集めて、文法のカテゴリーごとに分類している問題集があるが、これらの利用も注意が必要である。上述のように、入試問題の作成に当たっては、問題作成者の最大の関心事は、そのテスト問題で受験者の能力を弁別することである。そのため、テスト・ポイントが複合的であることもあり、それらを1つの文法のカテゴリーに分類することは難しい。それにもかかわらず、問題集では後付けで特定の文法のカテゴリーに分類されるため、当該の文法の知識以外の要素の知識がなければ解けないこともある。

3. 受容技能の既製テストの問題点

では、受容技能の既製テストを用いる場合はどうだろうか。受容技能のテストは、テキストとそれに関わる設問から成る。

まず、リーディングでもリスニングでも、そのテキストが、授業で読んだり聞いたりしたものとのような関連性があるかを確認しなければならない。テキストの特徴としては、テキスト・タイプやトピック、メディアなどがあるが、どの観点の類似性を追求するのかということになる。たとえば、授業で物語文を読んだのであれば、テストも物語文にすべきだし、授業でアナウンスを聞いたのであれば、テストにもアナウンスを用いるべきであろう。

トピックの類似性は、もう少しやっかいかもしれない。例えば、教科書のトピックが何かのスポーツだとすると、テストのトピックをスポーツというカテゴリで揃えるのか、教科書で扱った特定の競技で揃えるのか、選手のレベルまで揃えるのかなど悩ましいところだ。類似性が高ければ高いほどよさそうであるが、教科書のテキストとの内容のかぶりが出てしまい、本当の意味での理解を問えないということもある。

考えなければならないのは、テキスト・タイプやトピックのことだけではない。当然、言語レベルも考慮する必要がある。特に入試問題は、3年間の学

習を終えたという前提で作られているので、未習の語彙や文法が入っていないか確認する必要がある。未習の語や表現があった場合は、注をつけるなどして対処することになるだろうが、あまりたくさんの注をつけるのは考えものである。そのような場合は、テキストそのものの使用を見直した方がいい。

相応しいテキスト・タイプやトピック、言語レベルのテキストが見つかったとして、次に考えなければならないのは設問である。この設問は、どのような読み方や聞き方を求めるかに関わるものである。まず、テキストに元々ついていた設問をそのまま用いる場合であるが、それが指導目標の読み方や聞き方に合っているかの確認が必要である。一方、テキストに元々ついていた設問とは別のオリジナルの設問をつける場合は、そのテキストのどこを問えるかを考えて設問を作るのではなく、基本的には授業で用いたものと同様のリーディング・タスクやリスニング・タスクを用いるとよいだろう。もちろん、授業でのタスクとテスト・タスクは、様々な要件によって多少異なることはあるだろうが、原則として、同じスキルを問わなければ、授業計画で設定した評価基準と異なってしまう。

4. 既製テストの波及効果

既製テストの生徒への波及効果はどのようなものであろうか。生徒にとってみれば、授業でやった問題やテキストがそのまま出るわけではないので、このような既製テストがどのような波及効果を及ぼしているのかをモニターすることは重要である。

既製テストが単なる実力テストであると思われるとしたら、それは問題である。実質、実力テストになっている場合はもちろん、生徒の認識として、実力テストと捉えられている場合も問題である。

単なる実力テストと思われたいためには、何らかの観点で、授業とテストがつながっていないなければならない。また、こうしたつながりを生徒に説明しておくことも重要であろう。そうすることで、定期試験に向けて、生徒はテストのねらいを正しく認識し、勉強に励むことができる。

コミュニケーション力を高める 英語の授業(3)



一どのように授業の中に プロジェクト活動を取り組んでいくのか

林 秀樹 Hayashi Hideki (滋賀大学教育学部附属中学校)

1. はじめに

最終回では、自分の思いや意見を自分の言葉で表現し、交流する活動を紹介します。このような活動は生徒にとってはハードルが高く、難しいと思われるかもしれませんが、自分の伝えたいことを英語で伝えることができるようになることが、英語学習の大きな目標のひとつだと思います。また、自分の伝えたいことを英語で伝えられた経験が生徒の意欲を増し、自信につながります。その表現活動のために必要な2つの実践例とディベート活動を紹介します。

これらを視覚的に自分で確認できるようにワークシートを作成し、スピーチの内容を考えさせます。

例1 『自分の経験を手紙形式で相手に伝えよう』

中央の「これまで経験してきたこと」から、「始めた理由」「それを通して経験したこと」「現状」「これからについて」「読み手へのメッセージ」をまとめさせました。

例2 『私の思い～自分が今一番みんなに伝えたいこと～』

「1番伝えたいこと」から「内容1, 2, 3」のそれぞれに2つずつそれに関わるエピソードを書き、最後に伝えたいメッセージをまとめさせました。

これらのワークシートを最初に使うことで、「書くことがない」と言う生徒は減少します。相手に伝えるときに論理的に伝えることの大切さを学ぶことができ、それがディベートにもつながっていきます。

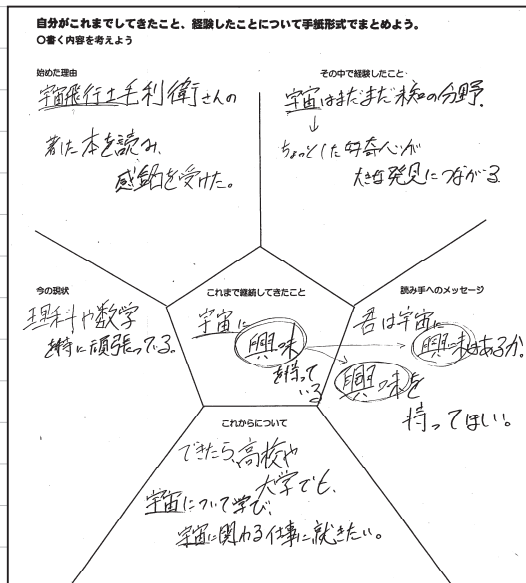
2. 伝えたいことを整理し、深める

伝える活動としてスピーチがあります。スピーチを行う際には内容をしっかり考える必要があります。その際に大切にしていることが2つあります。

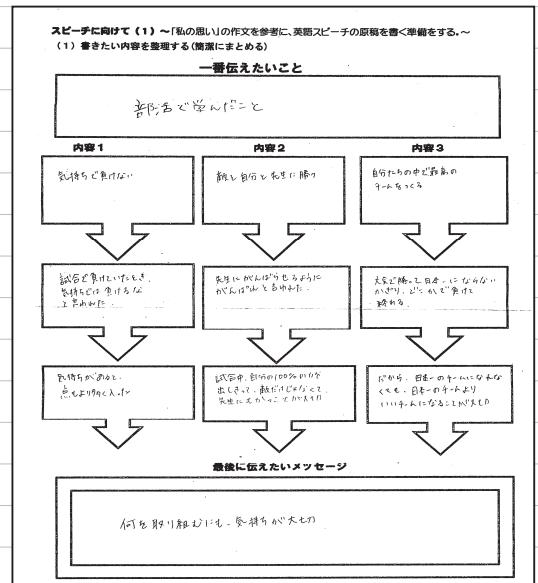
- ① テーマがぶれないこと(話に一貫性があること)
- ② 論理的であること(相手にわかりやすく伝える)

3. 伝えたい内容を英語で伝える

内容を整理し、まとめられたら、次はそれを英語にしていく必要があります。ここが1番の課題になると思います。よく「英作文は英借文」と言われています。



例1のワークシート



例2のワークシート

インプットしているものの中から、自分の伝えたいことを伝えるときに使えるものを利用して書くことがまず大切です。前回(第2回)の項でも述べた教科書の活用の大切なポイントである、「教科書の表現を自分の言葉として使える」ことがここで生きてきます。生徒達は教科書に出てくる表現をたくさん利用します。このことにより、教科書の表現が自分の言葉として使えることがわかり、教科書の音読などの練習も真剣にできるようになります。

次に大切になるのが、例の提示です。表現の活動の前に、最初にたくさん例を提示します。よいモデルが生徒達のゴールになっていきます。例えば、『自分のお気に入りの本を紹介しよう』という課題では、パワーポイントとワークシートを用いて様々な例を示しながら、英語の文の使い方を示していきます。

浦島太郎

It's a story about a (fisher) man.

His name is Urashima Taro.

He saves a turtle.

He goes to Ryugujo with the turtle.

Introduce your favorite book ~お気に入りの本を紹介しよう~		
[task 2] 次の本を紹介するときのように紹介するかまとめてみよう。		
Book	It's a story about	登場人物、本の紹介、自分の感想など。
講義太郎		
かぐや姫		
ドラえもん		
ワンピース		
嵐の嵐		
嵐らの学校競争		

また、生徒達はとにかく言いたいことをそのまま英語にしようとしてします。まず、生徒達に英語でどう表現して良いかわからない文を、黒板の右半分自由に書かせます。そこにはこんな文がありました。

「彼と私の誕生日は同じである。」

それを、クラスみんなで、どう表現するかを考えていきます。生徒達は「同じ」という単語が英語でどういうかわからず、困っています。すると生徒は、

S₁: When is his birthday?

S₂: It's ○ △.

S₁: じゃ、こう言える。My birthday is ○△.

His birthday is ○ △ too.

他の聞いている生徒は「なるほど」と言っていました。また、右半分生徒と考えながら英語に直していく際には、右半分の黒板の上部に、
誰が(主語) → どうする(動詞) → だれ[何]を
→ どのように(how) → どこ(where) → いつ(when)
→ なぜ(why)

などの語順の一覧表を黒板に貼り、クラスみんなで協力しながら、それらに言葉を当てはめさせ、英語に直していきます。こういう語順でどのような言葉で言えるかを確認できた段階で、未習の単語が出てきたときには、辞書で調べるよう、指示を出します。ただ闇雲に辞書を使わせると、全く自分では理解できていない例文を丸写ししてしまいます。

生徒はよく単語一語わからないとその文全体が言えなくなってしまいます。それでは、いつまで経っても自分の言いたいことを表現できるようになりません。次の4つのルールが大切です。

- ① 「言いたいこと」を「言えること」に直して書く
- ② 日本語の表現にこだわりすぎない
- ③ 主語と動詞が必ずある文
- ④ なるべく単文を多用する
- ⑤ 辞書はどういう文かを頭で整理してから使う

4. ディベート活動

前記で紹介したような活動を1年生から定期的に行うことで、自分の伝えたいことを英語で伝える力が少しずつ身に付いていきます。最後に紹介するディベート活動はそれらの積み重ねの上に成り立っていると考えていただきたいと思います。

(1) 課題の設定

話し合うお題により、ディベートの盛り上がり方は大きく変わってきます。最初はよくある「弁当 vs 給食」などもよいと思います。生徒の興味も大事なので、生徒にディベートでやってみたいお題を募集しました。すると、時事ネタ、学校生活に関すること、自分たちの興味のあることなど様々なものが出

てきました。ただ、それらのどれが適しているかを選ぶ際、その話題で話すときの単語の難易度も大きな要素になります。でももっと大事なものは、賛成、反対どちらにしろ、根拠がたくさん述べられるかと言うことです。「好きなものは好き」みたいな話になるとディベートとして盛り上がりません。

(2) 意見を述べる

次は意見が言えるようになることが大切です。そこで行ったのが、opinion レースです。ペアで一方がひとつ意見を述べます。例えば、

S₃: I like The Beatles.

S₄: Why do you like The Beatles?

S₃: Because their songs are good.

S₄: Why do you think their songs are good?

S₃: The melody of the songs is good.

S₄: Anything else?

S₃ は自分の述べた文の理由や例を述べていきます。S₄ は、相手の意見に対し、質問を続けます。どれだけの数の意見を言えたかを競います。

次に、相手の意見に応じて、意見を言う練習をします。“Summer vacation is better than winter vacation.” というお題でペアになり賛成と反対の立場に分かれ意見を言い合います。ただ意見を述べるのではなく、ここでは相手の意見に対応した意見を述べ合うことが重要です。賛成の意見 “We can enjoy swimming in summer vacation.” に対し、反対の意見 “We have more homework in summer vacation than in winter vacation.” では、相手の意見に対応していないことになります。

“I see your point, but we can enjoy skiing in winter vacation.” と言えば対応します。

最初は紙を交換しながら、紙上で意見の交流を行います。紙上で行うことで、相手の意見を読んで確認でき、反論しやすくなります。また、相手の意見で使えるものがあるときは、利用して意見を述べるができるようになり、ディベートで使う表現が定着していきます。

そして、ディベートのまとめとして、8人のグループで様々なトピックでディベートを行いました。ジャッジの仕方も事前に練習を行います。

Topic: _____ Is summer vacation better than winter vacation?		Topic: _____ Is I don't agree?	
No.	Reasons / Opinions	No.	Reasons / Opinions
1	We have a summer holiday.	2	I don't like it, because too many people are there. It's very crowded. I'm very tired.
4	Summer vacation is very long. So, we have much free time. We can enjoy many things, such as swimming in the sea, travelling.	3	Summer vacation is too long. I miss my friends.
6	We can enjoy eating ice creams. Ice creams are very delicious.	5	I don't swim. I like skiing better than swimming.
8	We have some exciting events in summer vacation, too. We have sleep.	7	If you eat much ice creams, you will have stomachache.
10	In Oton we can see many 桜. They sometimes give me some お土産. I'm very happy.	9	We have many exciting events, such as Christmas, snow your day.
12	Sky in summer vacation is very beautiful.	11	New year's day is better than Oton because we can get snowflakes.
14	We have much homework. We can study more.	13	Sky in winter vacation is clean. We can see many stars at night.
16	So you have to study more.	15	I don't like math. It's very difficult.
		17	We have 着き形の home work. It's Japanese tradition. 着き形は is good for Japanese.

◎ 桜のつぼみ (桜の花) → 桜が咲くまで待つ → 1. 桜
◎ 英語の表現が似ている (+1. 6)
◎ 情報があり難易度がある or 相手の意見に対応している (+1 - 3. 6)
最高得点: 3. 6

ジャッジ: 賛成 (青) / 賛成 (緑) / 賛成 (赤) / 賛成 (黄) / 賛成 (紫)
コメント: _____
記入者: _____

7. 本時の目標

- ・ 単元目標 (1) ・ 評価規準①: ディベートで役割ごとに積極的に活動している。
- ・ 評価規準②: 身近な社会的な事柄について、メモに基づき、自分の意見を理由とともに述べたり、議論することができる。

8. 本時の学習過程 (第4時)

学習内容と学習活動	指導上の留意点 ★ 思・料・表を伸ばす方策 ◆ 評価
導入 1. 今日の目標を確認する。	
2. グループでディベートをするのに必要な事柄を決める ① 役割 (ジャッジ, 肯定側, 否定側) を決める ② スコア記録表、紙、筆、定規	・ グループでのディベートがスムーズに進むように、対戦と役割の順番を提示する。 ・ 今日の課題を提示する。
展開 3. 本日の課題それぞれに対して自分の意見を肯定側と否定側、またそれに対しての予想される反論意見のメモを見直す。	・ このときは評書を使用してもよいが、相手に伝えることが目的であり、相手に伝わらないような難解な単語などを使わずに、相手に伝わりやすい表現を使うように指導する。 ・ 相手に明確に伝わるように音読しながら確認するように指導する。 ◆ [表現] ◎: ノート
4. それぞれのグループでディベートを行う。 やり方 ① A 肯定側 B 否定側 CD ジャッジで5分間ディベートを行う。 ② その後1分間ジャッジはフロチャートを基に相談して、勝敗を決定する。 この手順で役割をスライドしながら、4回行う。課題ごとに3回。	・ 相手の意見をふまえて、自分の意見を適切に相手に伝える方法を指導・判断する。ジャッジの立場で、対立する二者の意見を聞き、より論理的に判断し、意見が述べられているかを判断する。 ・ ディベートがスムーズに行われるようにタイムキーパーの役割を果たす。 ・ グループでそれぞれの役割が機能しているかを観察し、うまくいっていないグループがあれば支援を行う。 ・ ボイスレコーダーをそれぞれのグループに配り、次の時間に振り返りの時に使うこととそれで評価することも伝えて、自分たちのグループのディベートを録音するように指示する。 ◆ [意欲・関心] ◎: 観察、ボイスレコーダー ◆ [意欲・関心] ◎: ジャッジペーパー、ボイスレコーダー
まとめ 8. 本時のまとめをする。	・ 次にボイスレコーダーを使って、今日の振り返りをするのを伝える。
9. 資料・教具・準備など 作業 : 生徒用ワークシート、ボイスレコーダー、プレゼンテーションソフト	

5. おわりに

英語でディベートするのは中学生にとっては困難な課題かもしれませんが。生徒の現状と課題に合わせた授業をすることはとても大切です。しかし、『生徒にこんなことができるようになってほしい』という願いと目標を持たないと、毎日の授業をただ、こなすだけになってしまいます。

人との関わりの中でしかコミュニケーション能力は育たないと思います。まだまだ課題はたくさんありますが、授業に様々なプロジェクト活動を取り入れ、人としっかりと関わっていける力を育てられる授業を作り上げていくことに挑戦していきたいです。

小学校英語 Just Now

1. はじめに

本校は、長崎市に落とされた原子爆弾の被害を受けた悲しい歴史を背負っています。校舎の敷地には、被爆校舎や慰霊碑、平和のモニュメントなど原爆に関するものが多く存在し、平和学習や慰霊のために国内外から多くの人々が訪れます。本年度は研究主題を「確かな学力を身につけ、平和な未来を構築する児童の育成～思いを伝え合い、人と関わりを深める活動を通して～」と設定し、総合的な学習の時間や道徳を中心として全教科・活動と関連させながら平和について学び、発信しています。

今年の7月に、イタリアの小学生から平和の願いが込められた折り鶴が贈られました。このことをきっかけに、5年生ではイタリアの小学生と交流を深める活動を計画しました。そこで今回は、*Hi, friends 1* (文部科学省) で初めてアルファベットを題材とする Lesson 6 「アルファベットを探そう」の活動を、子どもの実態や興味・関心に沿ってアレンジした授業実践、『アルファベットを使ってメッセージカードを作ろう！ ～平和の思いをメッセージカードで伝えよう～』についてご紹介します。

◆本校のHPに公開の指導案とあわせてご覧ください。

<http://www.nagasaki-city.ed.jp/shiroyama-e/>

2. 小中連携授業

本単元の最後の時間を小中連携事業の一環として公開し、授業研究会を行いました。また、市教委指導主事に模擬授業・公開授業に来ていただき、指導をしていただきました。これまで、小中連携の情報交換の際に中学校の先生方から「外国語活動でアルファベットは書けるようにしてほしい」とたびたび言

アルファベットを使った コミュニケーション活動 ～平和の思いを世界に伝えよう～

木下 聖子 Kinoshita Seiko
(長崎県長崎市立城山小学校)

われてきました。しかし、アルファベットを書けるようになるといった技能的なことは、現行の『小学校学習指導要領 外国語活動編』(文部科学省)には明記されていません。そこで、「アルファベット」を取り扱った授業研究を公開し、研究会を行うことで、授業の実態や活用している教材を具体的に理解していただき、指導法の継続性(小学校外国語活動で行ったような活動の設定、外国語活動で使った教材の活用)につなげたいと考えました。

3. 授業の実践

(1) 活動目標一目的意識と相手意識の明確化

アルファベットを使ったコミュニケーション活動の充実を図るために、次の活動目標を立てました。

- イタリアの小学生に、簡単な英語(単語)で作成したメッセージカードを贈ろう
- 級友のために、メッセージカードを作ろう

活動目標を立てることで、カード作成は自分のためだけでなく、相手のための(相手のことを考えた)活動になります。【目的意識の明確化】

最後に作成したカードについて、ペアで振り返りをします。相手のために作ったものなので、相手を認めたり、賞賛したりできる環境が自然に作られます(意識の共有)。また、4つのコミュニケーションポイント(Smile, Eye contact, Clear voice, Gesture)を活動の中でうまくできている子どもを認め、これらをクラスで意識させます。【相手意識の明確化】

(2) コミュニケーション活動について

ルールはシンプルに説明することと、ALTに英語で説明してもらい、担任が子どもにわかりやすい英語で繰り返して、活動のやり方や目的を理解させることを、日頃から心がけています。そして、子

もたちに自信をもたせ、次の活動につなげます。

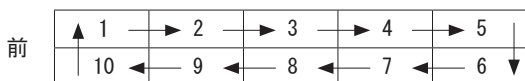
(3) オリジナル教材と手立て (5 時間配当)

【第1時】意欲の高まりを継続させるため、まず、本単元のゴールを紹介しました。同学年の先生の協力のもと、メッセージカードづくりのDVDを作成しました。セリフは本単元で使用する英語表現だけにし、セリフが少ない分、動作や表情で何をしているかわかる内容にしました。その後、ワークシートを配り、平和の思いを感じる言葉とそれを選んだ理由を日本語で書かせました（それぞれが選んだ言葉は第5時のメッセージカードづくりで使うため、授業後に教師が英語に訳しておきます）。

【第2時】黒板にアルファベットの大きな文字を書き、何に関するアルファベットかを当てるクイズをしました。ペアやグループで相談させたり、ジェスチャーや関連のある言葉でヒントを与えたりすることで、全員がクイズに参加できます。例えば、黒板に書かれたHとBを読みながら、何のことか推測していきます。筆箱を指差し、書く動作をすることで「鉛筆のHB」とすぐに気がきました。

【第5時 展開】—メッセージカードを作るコミュニケーション活動 慣れ親しんできた表現を使い、店員役と買い物客役に分かれて行うSHOPPINGゲームで、自分がほしいアルファベットのカードを集めながら、メッセージカードを作成します。手順は次の通りです。

- ① デモンストレーション：めあてを確認したあと、ALTとのSHOPPINGゲームのデモンストレーションを見せ、コミュニケーションポイントを意識させる（どうするともっとよくなるかなど）。
- ② 表現・コミュニケーションの確認：隣の席と机を向かい合わせ、前後の席も机を隙間なく付けます。向かい合ったペアで表現を確認します。



10秒たったら合図で矢印の方向に席を移動し、次のペアと会話します。

- ③ 本活動—SHOPPINGゲームとメッセージカードづくり：コミュニケーションをしながらアルファ

ベットのカードを1枚ずつ集め、メッセージカードに貼っていき、ことばを完成させます。前後半で店員役と買い物客役の役割を交代します。

前半の活動を終わったら、評価の時間を設けます（中間の評価）。子どもたちが、コミュニケーションポイントを意識してできているか、自己評価や他者評価をし、互いの良さを認め合います。また、活動で困った点を出し合い、話し合っ、後半の活動に生かします。

活動で困った点としては、店に人が来ない（コミュニケーションがとれない）ことなどがありました。指導者が解決策を示すのではなく、子どもに意見を出させることで、後半のコミュニケーションの活動が充実します。



【第5時 まとめ—振り返りとその発表】学習の振り返りをカードに記入させたあとに発表をさせました。振り返りカードには活動の楽しさだけでなく、単元を通して感じたことなどが書かれていました。そして、作成されたカードに込められた「平和への思い」を紹介しました。

指導していませんが、振り返りカードに、掲示された単語やゲームの名前を写して書く子どもが増えています。自分から言ったり聞いたりした英語を書きたいという子どもの意欲の高まりを感じました。

4. おわりに

本単元は、英語というツールを使って自分の思いを表現し、相手意識をもって取り組んだ活動になりました。授業後の研究会では、中学校の先生方から「英語を習得するだけでなく、その態度や助け合う、声をかけ合うといった姿勢がよかった。中間の評価や振り返りの発表など参考にしたい。小学校の学習内容を意識して頑張りたい。」などの感想をいただきました。小中連携の大切さを改めて感じました。

Naming Characters in *NEW CROWN*

Thomas Hardy

(Keio University)

Shakespeare may be right when he has Juliet argue that “a rose / by any other name would smell as sweet,” meaning that the names of things do not change what they really are in the real world. But fictional characters, whether in a play by Shakespeare or a textbook by New Crown writers, are not, by definition, in the real world. They are fictional. So calling a rose a skunkweed does change our perception of it. That being the case, it is fair to ask how the names of the primary characters of *NEW CROWN* were chosen and what do their names mean.

The four basic principles governing the practice of naming in *NEW CROWN* are simple: the names are relatively short; Japanese students will find them easy to pronounce and remember; the names are relatively common; and they don't reproduce names of characters appearing in other junior high school textbooks. Let's look a little more closely at each of the names of the main characters.

◆ Tanaka Kumi

Tanaka (ricefield & middle, 田中) is the fourth most common Japanese surname. Kumi, in New Crown, is written with the *kanji* 久美, which mean “for a long time (eternal, everlasting)” and “beauty”, is also a popular name.

◆ Kato Ken

Katō (加藤), which uses the characters for “add/increase” and “wisteria”, is the eleventh most common Japanese surname. The character for the character Ken is 健 or “healthy”. It is one of the more popular names for men in Japan, particularly if used in combination with a second character, such as Kenichi or Kentaro.

◆ Emma Simmons

Emma comes from a Germanic word meaning “whole” or “universal”. As a name, it is simple but distinctly feminine. There are many Emmas in history and literature, from Queen Emma, who married King Ethelred the Unready in 1002, to the Harry Potter actress, Emma

Watson.

The name Simmons most likely came from the Biblical name Simon or Simund, which is the Greek form of the Hebrew name, Shim'on which meant “hearkening” or “listening”.

◆ Paul Green

The name Paul, meaning “small” or “humble”, comes from the Latin family name of Paulus. The single most famous Paul is Saint Paul (nee Saul), a leader of the early Christian Church and the writer of most of the epistles of the New Testament. It is simple and very popular in many countries.

Green means, well, green. It has several possible origins as a name. It could be a physical reference to someone living on or near the village green. It could refer to a person who is green or untested. Or, it could refer to the person who played the part of the Green Man during May Day celebrations. It is a common surname in the US, the UK and, in other forms, throughout north Europe.

◆ Raj Shukla

The name Raj is from Sanskrit, and means “king” or “rule”. It is not especially popular as a first name for men, but a relatively common family or surname. The best know Raj in popular culture is Raj Koothrappali, a character in the TV show Big Bang Theory. Raj's family name, Shukla is also from Sanskrit and means “white”. It is a common surname in North India.

◆ Yang Meiling

Meiling 美玲 means “beautiful sound” (more specifically tinkling, as of pieces of jade or the sound of a small bell) It is the third most popular given name in Taiwan. Yang 楊, meaning “aspen”, is the sixth most common family name in mainland China. It has been used as a family or clan name for nearly 4,000 years.

The names, by and large, fit the New Crown criteria: short, easily said, common, and not in use elsewhere.

Think about your name. What does it mean? Where did it come from?



NEW CROWN(三省堂)採用校の先生より、Let's Readの部分をどのように指導したらよいか頭を悩ませている、という声を聞くことがあります。量が多く、濃度の高い内容の英文を、限られた授業時間で、一文ずつ説明する時間はない、しかし全く無視して飛ばすわけにもいかず、日本語訳を生徒に渡すこともあるようです。日本語訳を渡すことについて、全く異論はありません。どれだけ内容に踏み込めるかは、時間の問題となります。とりあえず読んで、英文の大意を掴むにしても、日本語訳が手元に残らないと、生徒は心もとないものです。ただ生徒が訳を読んで「ふ〜ん」で終わらないよう、しっかり英文と対峙させ、意味を考えさせることが重要です。

ここで、実践活動例をご提案します。昨今、Web上には無料で使えるオンライン翻訳サイト(翻訳機の機能を持ったサイト)があります。

自力で訳さずに翻訳機を用いることを生徒に推奨するのは、どうも気が進まないかもしれません。しかし翻訳機はご存じの通り、言語力がないことには使いこなせません。翻訳機を通して「あなたたちのほうが翻訳機より英語と日本語の意味がちゃんとわかっているよ」と伝えることができます。以下はNEW CROWN Book 1のLet's Read 2“A Girl Saved Many Lives”の最初のパラグラフです。

That Sunday started quietly. Then the earth moved. A big earthquake occurred deep in the ocean near Indonesia. A tsunami started. The tsunami rolled across the Indian Ocean. It killed about 225,000 people that December 26. But on one beach in Thailand, no one died. Why?

これを、ある翻訳機(オンライン翻訳サイト)に入力すると出てきた日本語訳は以下になります。

「その日曜日は静かに始まった。その後、地球が動いた。大地震は、インドネシア近海で深いが発生しました。津波が開始されました。津波は、インド洋

を横断ロール。それは、12月26日を約225,000人が死亡。しかしタイで1ビーチで、誰も死ななかった。なぜ？」

この日本語訳をそのまま生徒に配布します。生徒は、日本語訳をざっと読んだところで、下線部の辺りで必ず「あれ? 何言っているの?」と意味不明なことに気づきます(授業では下線は未記入)。

次に生徒は、読んで違和感がある、もしくは意味不明だった部分に下線を入れます。

その後、教科書を開かせ、各自で初めて英文を読ませます。英語の読解力の高い生徒であれば、ここで、「あ〜」とすぐに翻訳機の間違いに気づくこともあります。Let's Readの語彙欄には日本語がすでにあること、先に翻訳機で大まかな日本語訳を読んで背景を与えられていることが、初見の英文理解の大きな助けとなります。読みながら、日本語で下線を入れた箇所当たる英語に下線を入れていきます。

「あなたたちの方が、翻訳機より言葉の意味がわかっている。翻訳機の手を直してあげてください」と指示をします。ここからは日本語の訂正です。ペアやグループでの作業にすることで、各自の気づきを高め合うことができます。

「インドネシア近海で深いが発生しました」の部分は、教科書の語彙欄のdeepの日本語が「深いところで」とあるので、中学1年生の日本語力ならずぐに正しく明確な意味にたどりつけるわけです。

この活動には次の利点があります。

- 日本語訳に対して能動的に取り組める
- 英文に対峙して意味を考えられる
- 背景知識を活性化させて英文が読める
- 単語の複数の意味、文の構造への意識を高められる
- 短時間でまとまりのある文の意味をとらえられる

生徒達のアナログ力(言葉の理解力)が翻訳機に勝っていることが活動の動機づけになります。生徒自身が翻訳機に入力してもよいでしょう。